

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟

会報 No.34

平成19年11月24日

新しい試みへの挑戦



会長 新堀 豊彦

前号で予告いたしましたように、私共は来年設立六十周年を迎えます。

この歴史は大変な重味であると思いますが、時代の大きな変化の中で、日本のかけがえのない古典芸術である能を、謡曲を、横浜においてとにもかくにも守り続け、発展させて来たことを誇りに思っております。

この誇りをさらに継続させて行くために、六十周年を新たなステップとして活かしたい、と考えております。伝統のすばらしさを若い世代に正しく伝える時代の変化に対応すること。

去る九月八日、横浜能楽堂で第十一回横浜飛天双〇能において

能「九頭龍」を上演したいと考えております。これは、シテ方は勿論、ワキ、地謡方、囃子方に至るまで、すべて高校生以下の子供たちによって編成され演じられます。

一九九八年、やはり大倉正之助師の指導によって始められたもので「九頭竜クラブ」という子供たちの集まりであります。しかも演ずる主題は、箱根芦ノ湖の守り神である「九頭竜」の伝説を基にした、創作能であることも、大変興味を湧かします。

小学生から高校生の子供たち（完全な素人）だけで、一番の本格的な能が演じられるということは私共にとって驚きであると同時に、限らない希望を感じさせるものであるといえるでしょう。

これをバックアップする『NP O法人子どもと生活文化協会』さんの御協力を得て、六十周年の大会の目玉にいたしたいと考えます。

したがって、さらに我々の出演にも、新しい試みに挑戦する意欲を持ちたいものだと思います。又、能楽堂にも御協力を得て、六十周年記念の第五十六回横浜能は、掃部山公園において、久々の新能（当連盟としては初めて）をやらせて頂くことにもなりそうであります。

そろそろ世代交替の時期でもあり、私共はともかく、この六十周年の舞台を歴史に残るもの

連盟報告

企画事業担当 鈴木 力雄

平成十九年度総会は、四月二十四日午後二時から横浜能楽堂二階レストランで開催された。

当日は、四月一日現在の会員数五三四名の過半数を超える三三八名（委任状によるものを含む）の出席により行われた。

新堀会長挨拶、来賓祝辞（横浜市・堀江武史文化振興課長、中村雅之能楽堂副館長）のあと、連盟規約に基づき、会長が議長となつて各議案が審議され、第一号議案、十八年度活動報告、決算報告、監査報告、第二号議案、十九年度活動計画（案）、予算（案）は何れも原案のとおり承認された。

来年は、連盟設立六十周年の記念の年となることから、能楽堂へ足を運ぶ若い人達への、見る人から一歩踏み出して、やる人へのモチベーションとなることを期待して、シテ方、三役全てを小・中・高の子どもたちで構成する「子ども能」を予定していることが、会長から披露された。

連盟主要行事の一つである、五流能楽大会を、九月二十二日（土）に横浜能楽堂で開催した。

出しものは、各会派の素謡、

とすべく、明年の秋までがんばりたいと存じます。

横浜五流能楽大会を終えて

観世流 梅若会 三谷 光子

九月二十二日、初秋の抜けるような青空からこの日も三十二度の熱気が齎されました。「お暑うございます」のご挨拶から、第二十三回横浜五流大会の開催でした。

日頃の成果を発表する各流派の方々は、外の暑さも忘れる力量の舞台を勤められました。

今回の各流派演は「放下僧」でしたが、皆さんの受け取り方はいかがでしたでしょうか。

それぞれの流派では、男性のみ・男女混合・多人数でとスタイルの異なる形で参加して頂きましたが、この自由さも五流大会の佳さかと思えます。これら謡と仕舞との一年ごとの競演の在り方は、五流大会の核として定着して来たなと感じました。

当日は、重複出演者も含めますと、約三百人を数えました。このような皆さまに支えられての「五流大会」でございます。

終日和やかに終ることが出来ましたこと幸せでございました。

最後にいろいろの不手際で御不快がございましたかと存じますが心よりお詫び申し上げます。

鎌倉扇ヶ谷の謡曲関連史跡

金春流 飯島 端治

扇ヶ谷(扇ヶ谷)は、鶴岡八幡宮周辺、大仏・長谷寺界隈、禅宗の有名寺院が立ち並ぶ北鎌倉などと比べると、人通りはぐっと少なめで、鎌倉の中では、観光地化が目立たない地域です。周囲の山裾に寿福寺・英勝寺・浄光明寺・海蔵寺・葉王寺など、それぞれ独特な魅力を持つ名刹が散在する、とても閑静な地です。そして、この扇ヶ谷には、謡曲に関わりをもつ史跡がいくつか存在します。

(一) 冷泉為相の墓

謡曲『六浦』と深いつながりを持つ史跡。浄光明寺の境内にあります。寺案内の栞(泉谷山浄光明寺略記)には、「史蹟冷泉為相墓 背後の山上にあつて宝篋印塔。為相は藤原定家の孫で、父為家の死後遺領細川庄の存続について異母兄為氏と争い、その訴訟のために関東へ下向した母・阿仏尼のあとをしたつて鎌倉に下り、藤ヶ谷(墓の西北の谷)に住み、鎌倉歌壇の指導者として活躍しました」とあります。謡曲『六浦』の典拠となった「いかにしてこの一本にしぐれけん」の一首は、ここ藤ヶ谷(扇ヶ谷の支谷)で編まれた為相の家集『藤谷和歌集』に含ま

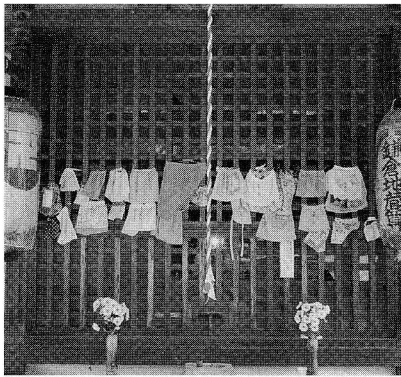
れます。

例えば、中世紀行文学の傑作『十六夜日記』(阿仏尼)も、謡曲『六浦』(作者不祥)も、上記の訴訟事件なしには存在しえなかったこととなります。阿仏尼・為相母子にとつて、訴訟事件は大変忌まわしい出来事ではありましたが、そのことで二人が鎌倉に下向したることによって、二つの名作が生まれるに至るのです。訴訟は為相側の勝訴に終わりますが、母阿仏尼は裁許をまたぐ世を去りました。その墓と伝えられる石塔が、英勝寺付近の路傍に建っています。

(二) 海蔵寺と源翁禪師

海蔵寺の栞(扇ヶ谷山海蔵寺略縁記)は、「開山源翁禪師は心昭空外といい、那須野の殺生石の伝説で名高い。禪師は、越前(福井県)の人で、福島会津の示現寺に二十六年間止住したのち、建長寺の大覚禪師に参禅・修学、ついで海蔵寺の再建のおり開山に迎えられた。開山にまつわる下野国(栃木県)那須野ヶ原の殺生石をくだいた話は、謡曲の『殺生石』にも語られている」と述べています。この海蔵寺には、『殺生石』の「玄翁和尚」にあたるという源翁禪師の座像が本堂に安置されるほか、殺生石伝説を載せる『開山源翁禪師伝』が所蔵されています。

話は飛びますが、京都東山の名刹真如堂にも、殺生石伝説につながる「鎌倉地蔵」と呼ばれる地蔵石像があります。真如堂近くの東北院(謡曲『東北』の謡跡)に足を運ぶ途中、たまたま見かけたものですが、その解説板(殺生石・鎌倉地蔵縁起)は次のように説明しています。「玄翁禪師は、殺生石を柱杖で叩いて割り、悪霊を成仏させました。禪師は三つに割れた石片の一つで地蔵菩薩を刻み、鎌倉に小さなお堂を建ててまつりました。(中略)鎌倉地蔵の名は、この尊像が当初鎌倉に安置されていたことに由来します」



京都東山・真如堂「鎌倉地蔵」

付近の路傍に「景清牢」と呼ばれる土牢跡があります。平景清は、文治元年の平氏滅亡の際に逃れ、十年後の建久六年、東大寺再建供養会のため上洛した頼朝に降り、鎌倉に連れて来られて和田義盛・八田知家に預けられ、翌七年、鎌倉で死没したと言われます。その景清を幽閉するために造られた土牢というわけですが、『新編相模国風土記稿』(天保年間、江戸幕府官撰の地誌)はこれを、「(景清が)此の牢に在りしと云ふは信じ難し。洞窟は土人(住民)が作為して、人をたぶらかしけるものか」と否定し、景清は八田氏に預けられた後、その許で飲食を断ち死没した、としています。

この説は、景清は日向宮崎に流され、宮崎で没したとする伝承や、謡曲『景清』の物語などとも対立します。一方は史実の世界、もう一方は伝承・作品の世界、何れと決めつけず、ともに大切にしたいものです。景清が没したという八田知家の邸宅は、鎌倉幕府の南門前にあったと言いますが(前掲書)、場所を特定することは出来ません。知家は、頼朝の信任厚い有力御家人、そのため、大事な幕府門前に配されたのでしょう。

「本尊」として信仰したという、小ぶりの十一面観音像があります。景清没後、娘人丸は海蔵寺付近の梅ヶ谷(化粧坂下手の谷)に向陽庵を構え、この観音像を本尊として父の菩提を念じたと伝えられます。『新編相模国風土記稿』には、「向陽庵・梅谷山の号あり。本尊観音へ立像、悪七兵衛景清の守本尊と云ふを安ず」との記述が見られます。その後(明治初年か)、向陽庵は廃寺となり、観音像は海蔵寺に移されました。

◆

以上のように、扇ヶ谷には、色々と興趣に富む謡曲関連史跡が存在します。中でも、景清にまつわる史跡や伝承が集まっている点に、興味をひかれます。

謡・仕舞を始めて

金剛流 枚田 潤子

二〇〇二年アイルランドのコークにある語学学校に四ヶ月留学をしました。ある日、そこで知り合った友人に「日本の踊りを見せて」と言われ、私の周辺に各国の十数名が集まって来ましたが、雰囲気だけでもいいからと言われ、日本舞踊をイメージしながら、体を動かし、薄い本を扇として使い「動作はゆっくり、本は

(三) 景清牢(景清窟)

地蔵は、江戸時代初期の慶長年間、当寺へ移されたと言いますが、鎌倉の旧所在地は残念ながら不祥。「もしや、扇ヶ谷では」と思い、海蔵寺のご住職にもお聞きしてみたのですが、扇ヶ谷四丁目、化粧坂上り口

(四) 景清守本尊

海蔵寺には、生前景清が「守

扇で：」と説明をしながら、なんとかその場を乗り切りました。この時、ふと自分も何か日本のものを身につけたいと思いました。

帰国後、ずっと子供の頃からコンプレックスだった低くて透らない声を克服するため、ボイストレーニングを始めようと思いました。しかし、ボイストレーニングをしたその先に何があるか？を考えた時、新しい事を始めるなら、何かに繋がるものにしてほしいと思いました。その少し前、母が横浜市主催の能のワークショップから金剛流の謡・仕舞を習い始めていました。留学中、何か日本のものを身につけたいと思いましたし、声も克服できるのではないかと、そしていつか母と一緒に舞台上に立てる事ができたならおもしろいなと思ひ、私も習うことにしました。始めてみて、思っていたよりも実際に舞う方がはるかに面白いと感じました。稽古を始めて数回で、舞台上で謡うことになりました。もちろん、声の出し方も全く分からない状態でしたが、ヘタでも失敗しても、まだ始めて一ヶ月では、これ位の出来でしようがないわね。」と思われれるだろうな、と思ひ、あまり緊張せずに初舞台を終えました。ただ舞台上に上った、ということだけの出来でしたが、舞台上に立

つ事はおもしろいと感じました。始めた頃は詰まってしまうって止まらなければいいがという思いでしたが、舞台を何度か経験するに従って、ここはこうして：と考える余裕が少し出てきました。



た。とは言うものの今年で五年目になりますが、なかなか上達せず、なぜこんなに覚えられない、出来ないのか？と思う毎日です。しかし、この緊張感と求められるエネルギー、それに加えて「気」が感じられること、舞台を踏めば踏むほど、奥深く、楽しみの深まりを感じています。何度も舞台上に立つ機会を与えていただき、厳しいながらも楽しく稽古をさせていただいて、またこの教室の方々とお会えた事は私にはとても良かったと思っています。

私が仕舞を始めるきっかけになり、また日本が誇る文化の一つであるこの伝統芸能をいつか

海外の友人の前で披露したいと思っています。

磯子区制八十周年

記念の蠟燭能

副会長 高岡 幸彦

横浜市は、二〇〇九年開港一五〇周年、市制一二〇周年を迎えます。

市では、二年後のめでたい年に向けて「チャンスあふれるまち横浜」の創造をめざすことを目的とした基本ビジョンを策定されました。

昭和二年に「区制」が施行されて出来た、鶴見・神奈川・中保土ヶ谷・磯子の各区では、区制八十周年記念事業として、又、開港一五〇周年のプレイベントとして色々な催しが企画・実施されています。

磯子区では、九月一日に蠟燭能「胡蝶」が磯子公会堂で催された。この蠟燭能は、杉田在住の山口昭氏が中心となって企画・催行された。演者も将来、日本の能楽界を背負ってたとつと嘱望されている、桜間右陳師が舞われ、素晴らしいお能でした。

薪能は、数多く演じられますが蠟燭能はめつたに観られないので、観客の興味を一段と引いた様で約六〇〇の席が満席になりました。薪能は照明は電燈でと

なりませんが、蠟燭能は蠟燭の明りだけで演ずるので演者の御苦労は大変なものと思われました。殊に面をつけて暗い舞台で舞われる右陳氏には引きつけられる様な思いでした。昔、電気のない時代にはこの様にして夜能が行なわれたのかと想像は大変興味深く感じられました。又、演じられた「胡蝶」も磯子区の木である梅に因んだ曲で長年磯子に住んできた私には感慨深いものでした。昔は「杉田梅林」は有名な名所で、あるお寺の境内には明治天皇お手植えの梅があったと記憶しています。

又、この蠟燭能を実現するまでの山口昭氏の御苦労は大変なものでした。当初は東漸寺の境内で薪能を行う予定でしたが、出来れば静かな環境でお能をという事で室内の蠟燭能に変わつたと聞いております。然しこれは消防との問題があり、舞台は固定し、焰を囲む紙も特殊な不燃物とし、当日には舞台の両側に目立たない様に消防士がバケツの水と消火器をもって待機するという、消防署の大変な指導と協力があって実現出来ました。

こういう中で横浜市・磯子区役所・磯子消防署・金春流桜間会・杉田劇場等との連携を保ち、又、切符の販売には市民グループ、学習グループ等を駆け回つ

てこの磯子区八十周年記念能を成功させた山口氏の努力、実行力には頭がさがる思いです。

趣味と謡

宝生流 早川 正道

私は謡の他に趣味をたくさん持っていました。その主だったものは釣り、登山、ドライブ、料理がありました。特に釣りが大好きで休日には必ず海に出かけ、釣った魚を料理して家族で味わったものでしたが、年齢が七十五歳になり体力の衰えと共に謡以外は全部やめることになりました。

私が謡を始めたのは、昭和二十年に会社に入社して間もない頃でした。私が入社した会社の社長は、謡とお茶の名手で素人として右に出る者がいないと言われた人で、社員にも盛んに奨励されました。

当時会社で百名くらい謡をやる人がいて各グループ毎に盛んに稽古が行われていました。年の初めには、社長の音頭で初会が催されて終日謡をうたい、謡会の後は、酒が出て大宴会が開かれました。謡より余興の方が上手なものもいて大変盛り上がったことを思い出します。

昭和二十五年頃から職分の高橋徳之先生が会社まで来られて我々をご指導くださいました。

始めのころはツヨ吟もヨワ吟もよく分らない者ばかりで大変困られたことと思います。

私も若いころは他の趣味に熱中していたので謡の方はあまり気が入らず勉強不足でしたが、六十歳から農林省の連中と稽古ができて一段と謡に興味が湧いてきました。

神奈川県嘱託会に入会したのが平成七年頃だったと思います。皆さんの謡を聞いてその上手さに感服いたしました。基本がよくできているのに驚きました。

いつの頃からか、会で独吟を謡うように勧められて簡単に引き受けましたが、舞台上上がって途中で途切れたことがありました。切戸口から秋山さんに助けていただき最後まで謡うことができましたが、それ以来独吟は百回くらい稽古をして、自信が持てるまではやらないと決めました。

現在の健康状態は足以外良好ですから謡に全精力を傾注して取り敢えず九十歳まで頑張ります。私は、謡という良い趣味をもって幸せだと思っています。

熊野古道を歩いて

観世流 三谷 光子
梅若会

熊野は三重・和歌山に跨がる

広大な森林地帯の総称です。

遠く平安期・能が観阿弥によって生れた頃に前後して、熊野詣がブームだった時期があり、都大路から大勢の男女が徒歩でお参りしたと伝えられています。いま熊野は数年前に世界遺産に登録され、古代を残す財産であると認定されたこともあって熊野歩きがブームです。

私も十五年前、熊野三山の参拝はしていますが、今回は遺産登録によって整備されたといえ平安期から残されている道を歩いてみたいと、再度の熊野に挑戦しました。

古道として残されている道は幾つかありますが「中辺路」を選びました。継桜王子から本宮大社まで二十二キロ余の路です。全行程はとても無理ですので途中から古道に入り本宮を目指しました。

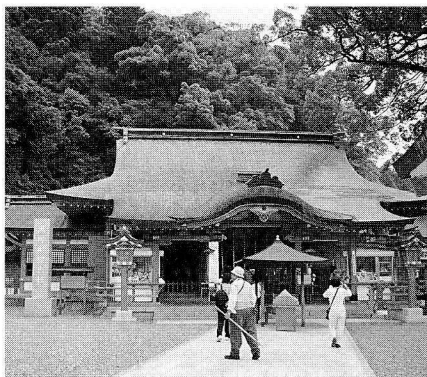
何処まで歩いても山・山・山に囲まれた道でした、疲れと共に足もとばかり見ながら歩く傍らに「ささ百合」が咲いていてひととき疲れを癒してくれました。上り・下りの多い道は大変でした、肩に食い込むリュックは捨てたくなり、歩きに大切な水までも重くて…。

梅雨時期でしたが天候には恵まれました。しかし石畳の道は脚にやさしくありません。

昔の人を思いながら、やっとたどりついた熊野本宮大社の森に包み込まれた時の安堵感は一つの目的を達成した喜びでした。

平安時代にこの道を歩いた人には、もつと難儀な道だったろうと思うと何故?と思います。単なる娯楽ではない筈です。信仰でしょうか。現代のように満ち足りた日常を送っている筈の古い昔の人が更なる苛酷を選ぶという事の不思議さは何なのでしょう。

次の日、那智大社、那智の滝を参拝し、天上からくだり落ちる水に圧倒され、その勢いに背を押されてもう一つの古道、大門坂を下りました。亭亭たる杉木立、抜けるような青空、石畳のこの古道も美しい道でした。



平安時代、初めて院政を敷いた天皇として有名な後白河法皇は何と熊野に四十数回も訪れたといわれているし同時代に生きた和泉式部は、八十才を過ぎて

熊野詣をしたとの伝説が残っていると語り部が教えてくれました。歩く道々には、発心門王子、大門王子、滝尻王子と王子名をつけた所が沢山残っています。

これはその場所から遙かな熊野三山に向かって、お祈りをした所とのいわれが残っており、今は休み所になっていますが何処も見晴らしのよい風が吹き抜ける所でした。詣の途中神と一体になった所かもしれません。

私は特に信仰心のもとに熊野歩きにチャレンジしたのではなかったのですが、この長丁場を無事に歩けたことは感謝の気持ちで一杯でした。

熊野詣より

二十一年一月以降の公演

横浜能楽堂では、次のとおり公演を開催いたします。

普及公演 | 横浜狂言堂 |

一月十三日(日)午後二時開演

お話 山本東次郎

狂言「末広」(大蔵流) 山本東次郎

狂言「素袍落」(大蔵流) 山本則直

普及公演 | 横浜狂言堂 |

二月十日(日)午後二時開演

お話 野村小三郎

狂言「佐渡狐」(和泉流) 野村又三郎

狂言「隠狸」(和泉流) 野村小三郎

普及公演 | 横浜狂言堂 |
三月九日(日)午後二時開演
お話 茂山千三郎

狂言「繩綯」(大蔵流) 茂山七五三
狂言「蝸牛」(大蔵流) 茂山千三郎
各回とも全席指定 一千元
お問い合わせ・電話 公演日の前月の第二土曜日 正午から。
窓口 公演日の前月の第二日曜日 正午から。

普及公演 | バリアフリー能 |
三月二十日(木)祝午後二時開演
狂言「千鳥」(大蔵流) 山本則俊
能「黒塚 雷鳴曲」(金春流) 山井綱雄
S席四千元、A席三千五百円、B席三千元。
介助者は一名まで無料。

電話・ファックス・Eメールにて
二月十六日(土)正午から。
窓口・二月十七日(日)正午から。
お問い合わせ・お申し込みは、
☎〇四五(二六三)三〇五五まで。

編集後記

▽連盟設立六十周年のとし来年は、子供能「九頭龍」と「新能」の横浜能」と、楽しみ多いとし、となります。
▽今号は各流の熱意により投稿を多くいただきました。一部は次号に送らせていただきます。

横浜能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合
〒233-0013 横浜市港南区丸山台二丁目
二九一七 新堀方
FAX 〇四五-八四四-二九〇三
◎電話の場合 横浜能楽堂
TEL 〇四五-二六三-三〇五〇